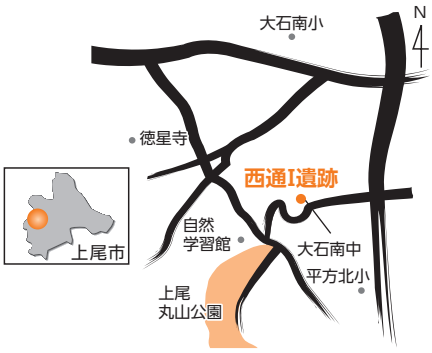
上尾歴史散歩 283

遺跡が語る上尾の歴史

中世豪族の存在を示す古瀬戸灰釉草葉文瓶（かいゆうそうようもんへい）

～西通（にしどおり）Ⅰ遺跡～

写真１　西通Ⅰ遺跡全景（中央に大きな堀跡が掘られ、その奥には建物の柱跡や、これを壊す四角い墓壙などが見られる）



上尾市内には、鎌倉時代や室町時代を中心とする中世の城館跡が、伝承や発掘調査によって約20カ所確認されている。城館跡は、豪族の居住空間と領地を治めるための政庁機能を持ち、交通の要衝や軍事的な拠点に造られることが多い。発掘調査を行うと、堀や溝で区画された区域に柱穴が規則的に掘られた建物跡が見つかり、その遺跡が城館跡であることが分かる。

西通Ⅰ遺跡もその一例で、昭和57年に大石南中学校の運動場拡張工事に伴って発掘調査が行われた。調査の結果、堀跡や溝、井戸跡、掘立柱建物跡、墓壙（ぼこう）など多数の遺構が確認された（**写真１**）。

出土した遺物は、カワラケ、常滑・古瀬戸などの陶器、古銭など中世から近世にかけての遺物が主体であり、15世紀から16世紀を中心とした遺跡であることが分かった。

遺跡の全体は確認されていないが、本来は堀に囲まれた館であったと考えられる。しかし、建物跡を壊すように墓壙が掘られていることから、当初は館として利用されたが、居住者が去った後に墓地が造成されたことが想定できる。

建物跡や墓壙からは多数の遺物が出土しているが、その中で注目されるのが古瀬戸灰釉草葉文瓶である（**写真２**）。これは現在の愛知県瀬戸市周辺の窯で14世紀後半に焼かれた梅瓶形と呼ばれる形式の器で、植物の文様が描かれ、表面には灰を原料とした釉（うわぐすり）が施されている。中世において窯業は全国的に行われていたが、大半が従来焼かれていた土師器や須恵器のような釉を施さない陶器であった。しかし瀬戸は国内で唯一釉を施す陶器を焼いており、当時としては価値の高い陶器であったと考えられる。なお頸部より上は故意に打ち欠けられていることから、火葬した遺骨を入れる器として使われた可能性が高い。

古瀬戸灰釉草葉文瓶は、このような陶器を入手することのできる有力な豪族が、西通Ⅰ遺跡の周辺に存在していたこと示す重要な資料である。

（上尾市生涯学習課）

写真２　古瀬戸灰釉草葉文瓶（市指定有形文化財）

コラム column

文献にも登場する菅谷北城（すがやきたじょう）

中世城館跡が造られた鎌倉時代や室町時代は、縄文時代や弥生時代と異なって文献資料が存在し、遺跡の発掘調査との双方を比較することによって、より詳細な内容が明らかになる。しかし文献資料と遺跡の、歴史的な事件と関連をうかがうことのできる例は、上尾市内では菅谷北城だけである。

菅谷北城は、原市沼側の台地縁辺部に立地する城館跡である。江戸時代後期に編さんされた『新編武蔵国風土記稿』では、観応の擾乱で勲功のあった春日八郎行元が、菅谷村にあった丸七郎の領地を恩賞として拝領したことが記されている。

一方、菅谷北城の発掘調査はこれまでに３回行われており、堀跡が検出された他（**写真１**）、14世紀から15世紀にかけて焼かれたと考えられるカワラケや、常滑系の大甕（おおがめ）が出土した。これらの遺物は、文献資料と近い年代を示しており、文献が伝える菅谷北城がこの地である可能性が高まったと言える。

現地では、今でも当時の面影を残す堀跡や土塁の一部を見ることができる（**写真２**）。

写真１　発掘調査で検出された堀跡

写真２　現地に残る土塁